「おやさとふしん青年会ひのきしん隊第806回隊」に参加

深谷耕治

「おやさとふしん青年会ひのきしん隊」は、毎月1日～24日を隊期として、青年会員が第百母屋で合宿し、親里でのひのきしんに汗を流す場である。特に、今年は当隊結成60周年という記念の年であり、全国各地より大勢の青年会員が挙って入隊している。筆者も直属教会を同じくする者たちとこの5月に入隊させて頂いた。

青年会員は16歳から40歳までの男子を指し、学生会で活動する若い青年会員たちもこの節目の動きに乗り遅れないように『Happist』という学生会の機関誌の最新号で当隊を特集し、その様子を広く紹介している。当隊の理念や一日の流れなどの一般的な紹介は『Happist』やその他の記事に譲るとして、ここでは筆者の感想をメインに報告させて頂く。

筆者の参加は4回目となり、回を重ねるごとに当隊での生活や作業内容には慣れてくるが、班を同じくする約20名のメンバーは毎回変わるので班の雰囲気は回ごとに当然異なる。今回は筆者が所属するやまとよふき分会と、紀陽分会、奈良分会を一つの班として隊期を共にした。

さて、当隊では「教理の実践」が一つのテーマであるように思う。一般的に「実践」という言葉には、教えられたことをただ理解するだけでなく身に行うことが肝要だ、というメッセージが込められており、そこでは（1）意味内容の理解、（2）身体を通した具体化、という順番が前提となっている。しかし、当隊で学ぶことは、教えは必ずしもその順番で体得されるわけではないことだ。つまり、まず身に行う態度である。

たとえば、当隊では草引きの作業がある。天理教の教えに「草引きをしなさい」という教えはない。代わりに「ひのきしんしましょう」である。そこで当隊では、草引きの作業を「ひのきしん」として行う。その段階では「ひのきしん」という言葉の意味内容はそれほど明確ではない。しかし、それから後に自分が「欲を忘れて、ひのきしん」という教えに出会ったとき、五月の風を感じながら汗をにじませて黙々と草引きをしていた自分の〝あのとき〟の心境を振り返り、やはり〝あれ〟は「ひのきしん」であったと納得するのである。

筆者も、この度の入隊でこのような経験を何度となくして、天理教が少し分かった気がする。大勢の人に味わってもらいたい〝あの〟時間である。

「ようぼくの集い」講師としてヨーロッパ・アフリカ地域へ

森　洋明

教祖130年祭の「三年千日」の2年目となる本年、3月から6月にかけて「ようぼくの集い」が日本だけでなく、海外でも開催された。私は、教会本部からフランス語での「ようぼくの集い」の講師として任命を受け、5月2日から21日にかけて、ヨーロッパ・アフリカ地域を回った。担当した開催場所と参加人数は次の通りである。

3日（土）	ボルドー教会（フランス）	32名
4日（日）	大ローマ布教所（イタリア）	13名
10日（土）	ガリシア布教所（スペイン）	7名
11日（日）	ヨーロッパ出張所（フランス）	55名
14日（水）	ポワントノワール布教所（コンゴ）	46名
17日（土）	コンゴブラザビル教会（コンゴ）	94名

上記以外に、スペイン・マドリッド（6日）でも「ようぼくの集い」に準ずる形で講話を行った。フランス語圏ではフランス語で講話をしたが、イタリアやスペインでは、日本語で講話をし、それを現地の教友が同時通訳する形で行われた。

同じヨーロッパと言っても、それぞれに社会背景や文化が違う上、拠点ごとに布教伝道の形態も異なっている。そこにアフリカ（コンゴ）を加えると、担当した地域全体における差違はさらに大きなものとなる。そのような中で、例えば同じ内容のビデオでも、個人的な感想レベルの違いを考慮しても、その受け取り方や感じ方には地域差があるように感じられた。その地域差は講話の感想にも見受けられ、さらに加えるなら、この「ようぼくの集い」の開催そのものに対しても違いがあるように思われた。

「それぞれが定めたおたすけ活動を、土地所においてさらに推進することを誓い合うこと」が開催の目的である。私の講話でどれだけの成果があったのかは定かではないが、各拠点で布教伝道を展開されている方々を目の当たりに、私自身が多くの勇み心をいただくとともに、「天理異文化伝道」という研究課題にとっても多くのことを学んだ有意義な巡回であった。

ようぼくの集いを終えて（コンゴブラザビル教会）

台湾で日本語教育学の国際シンポジウムに参加

金子　昭

中国文化大学（台湾台北市）の日本語文学系主催の国際シンポジウム「〈学際的複合領域研究〉としての日本語教育学」が5月10日に同大学にて開催され、台湾、日本、韓国から多数の研究者が参加した。午前は基調講演が行われ、半田淳子氏（国際基督教大学）が「日本語教育における文学的教材の可能性」、また表世晩氏（韓国・群山大學校）が「植民地時代の日本文化と群山」と題して、それぞれ講演。午後は3つの会場に分かれ、日本語教育や日本文学、日本文化などさまざまのテーマで27の研究発表が行われた。私は、第3会場の第2セッションで座長を担当し、涂玉盞氏（中国文化大学）、長谷美貴広氏（南開科技大学）、中村威久水氏（和洋女子大学）の発表の司会進行役を務めた。

今回の台湾出張では、このほかキリスト教神召会神愛教会及び台北市先住民ケア協会への訪問取材を行い、また天理教台湾

伝道庁を訪問して、西初之庁長と井手勇書記と面会し、現在進めている天理教台湾伝道史の編集について意見交換を行った。

「Religion and Pluralities of Knowledge」会議に参加して

堀内みどり

標記国際会議が5月11日から15日にかけて、オランダ北部に位置するフローニンゲンのフローニンゲン大学で開催され、参加・発表した。フローニンゲン大学は、オランダでも2番目に古く、3番目に大きな大学で、現在20,000名以上の学生が学んでいる。2014年フローニンゲン大学は創設400年を迎え、その記念行事の一環として、ヨーロッパ宗教学会、世界宗教学宗教史会議およびオランダ宗教学会との共催で、標記国際会議を開催した。

今回のテーマは、中世以来ヨーロッパの諸大学が宗教というトピックに関与してきたということに関連し、グローバル化し「絡まり合っている歴史（entangled histories）」の現在において、宗教はどのような位置にあるのかという問題関心から、今回のテーマが決められた。

会議では4人の基調講演（一つは一般に公開された）と約300の発表があった。堀内は、「Ten Names for One God: What is the Concept of God in Tenrikyo thought in Europe?」という題目で、十全の守護という形で神を体得することが日常生活において人々が神を体感すること、納得することにつながり、「生かされる」という理解を容易にすること、また、神の創造されたこの世界において人間は生きている意味を見いだし幸福と平和を実現することが可能であることを、「元はじまりの話」を紹介して述べた。

出張報告：デンマーク

八木三郎

5月20日から25日まで研究調査のため、デンマークのコペンハーゲンに出張した。その目的は、近年のわが国のユニバーサルデザイン化した公共空間での利用者間に生じているコンフリクトの問題構造を明らかにし、必要の原理で設置された各種施設の適正利用へのあり方を検討する基盤研究のためである。

デンマークは社会福祉の上で重要な理念となっている「ノーマライゼーション」の発祥の地であり、障害者福祉の先進国である。また、人々のモラル醸成に力を注ぎ社会連帯を重視する国でもある。今回は障害当事者へのインタビューを主目的に現地に赴いた。

インタビューは、デンマークのパーソナルアシスタント（イエルパー）制度の創始者であるエーバルト・クロー氏をはじめとして、車いす当事者でありながら「合気柔術」のデンマーク師範になっているオーレ・キングストン氏、脊髄損傷者協会のヘンリク氏、スーザン氏等に聞き取り調査を行った。

第56回印度学宗教学会学術大会に出席

澤井治郎

標記学術大会が、5月31日から6月1日にかけて、種智院大学（京都市）を会場に開催された。第一日目の午後には、公開講演と、課題研究「宗教における言葉・音声」が行われた。公開講演においては宗教における「文字」について二人の講演があり、課題研究においては4人の発題者によって、それぞれ「ヴェーダとパーニニ文法学」、「民間信仰におけるお札」、「インド聖典解釈学」、キリスト教宣教による「聖典と口頭文化」の接触という多様な事例からの発表が行われ、特定の言葉や文字、本が何らかの宗教的機能や力あるいは正しさと結びつく事例が報告された。

筆者は「天理教における『道』」というタイトルで研究発表を行った。その中で、しばしば「この道」あるいは「お道」という言葉で天理教やその教えが表現されることを紹介し、昭和35年（1960）ドイツのマールブルク大学で開催された第10回国際宗教学宗教史会議における中山正善二代真柱の研究発表「天理教教義における言語的展開の諸形態」に依って、天理教教義における「道」の位置づけについて発表した。

その他、天理大学関係者による研究発表としては、澤井義次氏が「井筒・東洋哲学におけるコトバとその意味」と題して行った。

第271回研究報告会（6月12日）『ヴェニスの商人』の小箱(casket)をめぐるエンブレム的解釈について

山本真司

エンブレムやインプレーサの英国文化史に占める意義が長らく等閑視されてきた理由は、主として英国における関連出版物が希少であったことによる。先駆的研究としては、Henry Green（1897）以降、Mario Praz（1934）やRosemary Freeman（1948）の研究があるが、近年日本でもエンブレムブックや「ヴァールブルク学派」等の翻訳に加え、Peter Daly監修『エンブレムの宇宙』（2013）などの関連研究書が続々と出版されている。我々は今「エンブレム」に対して、Freeman的な狭義の定義・解釈から解き放たれ、Prazが主張したように当時の「時代精神」との連関で広義にエンブレム文献を理解し、さらにDalyの実践する「エンブレム的なもの」の現代メディアへの応用やMichael Bathの提唱する「エンブレム研究のグローバル化」を真剣に考えるべき時期に来ている。

本発表では、『ヴェニスの商人』における“fortune”と“lottery”という二つの言葉のエンブレム的解釈をめぐり、エンブレム文学の伝統だけでなく、イタリア商人の代表的運命観やギャンブル観など当時の社会的背景を視野に入れることにより、これらの概念がどのようにヴェニスという法の支配に基づく共和制国家を舞台とする芝居の複層的意味形成に貢献しているかを考察した。主に当時のヴェニスと英国における“lottery”の歴史と社会的意味を概観した後、「運命の女神」表象のイコノロジカルな変遷過程を考察し、「3つの小箱選び」の主題の背景となっている“fortune”と“lottery”のエンブレム的政治学とその文化的社会的意味を明らかにした。